

高台・峰寺瓦窯採集の瓦磚

1 はじめに

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室では、2007年11月22日に藤原宮最大の屋瓦生産地である高台・峰寺瓦窯の踏査をおこなった。本稿では、その際に採集した瓦磚類を紹介する。

高台・峰寺瓦窯について 高台・峰寺瓦窯は、通称国見山と呼ばれる独立丘陵の西麓に位置する高台瓦窯（高取町市尾・御所市今住）と、曾羽神社が鎮座する丘陵（通称曾羽山）の北麓から東麓に位置する峰寺瓦窯（御所市今住）のふたつの瓦窯からなる。両者は、谷を隔てて約100mと隣接することに加え、同窓の軒丸瓦が出土している。このことから、両者は一連の瓦窯群と考えられ、現在は一般的に高台・峰寺瓦窯と呼ばれている。いずれも未調査で、瓦窯の範囲や窯構造など詳細は不明である。高台・峰寺瓦窯の窯の位置や瓦窯の名称に関する経緯については、大脇潔氏の論考に詳述されている（大脇潔「東京国立博物館所蔵の藤原宮式軒瓦」『古代瓦研究V』奈文研、2010）。

これまでに高台・峰寺瓦窯から採集された藤原宮式軒瓦は、高台瓦窯で軒丸瓦6275A、6273B、6279Ab、6279B、軒平瓦6643B・Cがあり（石田茂作『古瓦図鑑』大塚巧芸社、1930；前掲大脇2010）、峰寺瓦窯では、6275Aの出土がある（岩本正雄「古瓦」『御所市史』御所市役所、1965）。このほかにも、製作技法や胎土の共通性から多

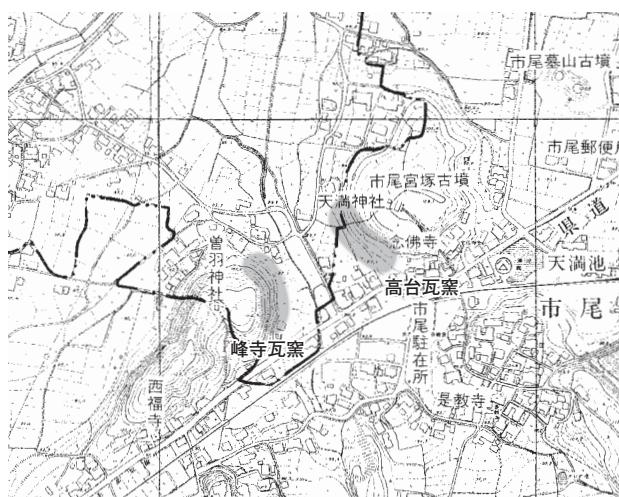


図52 高台峰寺瓦窯の位置 1 : 10000
(■部分が瓦採集地点)

くの軒瓦が高台・峰寺瓦窯と生産されたと考えられ（石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究V』奈文研、2010）、橿原市日高山瓦窯などから瓦窓が移動してきた例も確認されている。

2 高台・峰寺瓦窯採集瓦磚

踏査は、峰寺瓦窯と高台瓦窯両方でおこなった。瓦を採集した地点は図52に示してある。高台瓦窯では、丸瓦16点（2.2kg）、平瓦28点（4.9kg）、磚1点、用途不明瓦1点を採集し、峰寺瓦窯では軒丸瓦1点、丸瓦14点（1.4kg）、平瓦62点（9.7kg）、面戸瓦2点を採集した。

軒丸瓦 峰寺瓦窯で1点採集した（図53-1）。焼成の段階でかなりひずんでおり、断定はできないが、おそらくは6275Aと思われる。瓦当下半部の資料なので、接合技法等は不明だが、瓦当厚は1.8cmと薄く、瓦当裏面には粗いナデの痕が残る。焼成は堅緻で色調は灰色である。胎土に長石・石英・クサリ礫を含む。

丸瓦・平瓦 丸・平瓦については、5cm角以上残存する資料を対象に、凸面調整手法で分類をおこなった。高台・峰寺瓦窯採集資料でみられた調整手法は、A：縦縄叩き、B：縦縄叩きのちスリ消し（縄目痕残る）、C：縦叩きのちスリ消し（縄目痕残らない）、D：縦叩きのちカキ目調整（縄目痕残る）、E：カキ目調整（縄目痕残らない）の5つである。これらに加え、側縁が残存する場合は側縁手法の観察をおこなった。

丸瓦については、5cm角以上残存する資料は、高台瓦窯では6点、峰寺瓦窯では9点である。凸面の調整手法

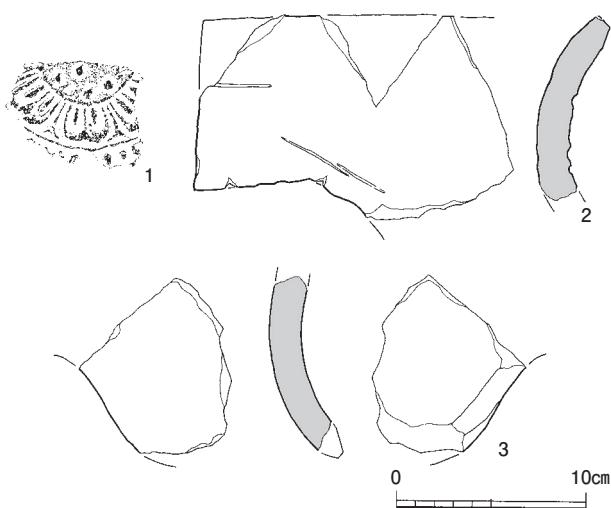


図53 高台峰寺瓦窯採集軒丸瓦・面戸瓦 (1 : 4)

は、高台瓦窯ではEが4点、Cが2点、峰寺瓦窯ではCが5点ともっとも多く、Bが3点、Eが1点確認できた。側縁が残存するものは、すべて分割破面が残らないc手法で（大脇潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集IX』奈文研、1991）、凹面側をヘラ削りするものもみられた。焼成は、硬質と軟質の両方があり、硬質のものは暗灰色～灰色、軟質のものは黄灰色～黄褐色を呈する。胎土は、高台・峰寺瓦窯の特徴として挙げられるクサリ礫を含むものが大半を占めるが、クサリ礫を大量に含むものと少量含むものとがある。また、このほかにも胎土にクサリ礫を全く含まず、代わりに5mm大の長石・石英を大量に含む資料を確認した（図54）。この資料に関しては、第11回古代瓦研究会シンポジウム「藤原宮式軒瓦の展開」で報告しており、筆者はこの胎土が藤原宮屋瓦生産グループのひとつであるN/Pグループの胎土と酷似することから、N/Pグループも高台・峰寺瓦窯とする考えを示している（前掲石田2010）。

平瓦については、5cm角以上残存する資料は、高台瓦窯で17点、峰寺瓦窯で32点である。高台瓦窯では、AとCが6点ともっとも多く、続いてBが4点、Dが1点確認できた。一方、峰寺瓦窯では、もっとも多い調整手法はCで16点あり、次にBが10点、Eが3点、Aが2点、Dが1点と続く。側縁が残るものはすべて、分割破面が残らないc手法だが、凸面と側縁の作る角度が鋭角になるものと鈍角になるものとが確認できた。また、凹面側をヘラ削りするものや、わずかだが断面形状が剣先形になる側縁もみられた。ただし、側縁手法と凸面調整手法との相関性はみられなかった。なお、分割界点の残る資料が1点確認できた。胎土・焼成・色調は丸瓦と同様である。

面戸瓦 峰寺瓦窯で2点確認した。図53-2は袖部から舌部にかけての破片である。凸面の調整手法はBで、繩

叩きをスリ消す際に工具が当たった痕跡がのこる。焼成は軟質、色調は黄褐色を呈す。胎土にはクサリ礫を少量含む。図53-3は舌部の破片。凸面調整手法はBで、焼成・胎土・色調ともに2と同様である。

磚 高台瓦窯で方形磚を1点採集した（図55）。厚さ7.8cm。上面は繩叩きを施し、下面および側面はほとんど調整をしない。粘土塊を型につめて製作したらしく、粘土の継ぎ目が確認できる。焼成は硬質で色調は暗灰色を呈す。胎土には長石・石英・クサリ礫を少量含む。方形磚は、藤原宮では出土例が少ないものの、第138-2次内裏地区・内裏東官衙地区で比較的まとまった量が出土している（『紀要2006』）。しかしながら、高台瓦窯採集磚には第138-2次調査出土磚にみられた筵圧痕はみられず、焼成・胎土・色調ともに異なる。

3 まとめ

今回採集した瓦から看取できた高台・峰寺瓦窯に関する事柄は以下である。①高台瓦窯と峰寺瓦窯ともに凸面調整の手法はいくつかの種類が確認できるが、基本的に両者は共通し、大きな違いは認められなかった。したがって、高台瓦窯と峰寺瓦窯が一連の瓦窯群であることが、瓦範だけでなく、製作技法からも追認できた。②胎土にクサリ礫を含まない瓦片を採集したこと、高台・峰寺瓦窯産の胎土にもバリエーションがあることが確認できた。③高台・峰寺瓦窯では、瓦類だけでなく、磚などの大型製品も生産されていた。

高台・峰寺瓦窯は、藤原宮屋瓦の最大の生産地とされながら、未調査のために瓦の製作技法など不明な点が多い。しかし今回の踏査で、高台・峰寺瓦窯で生産された瓦の具体的な様相の一端を知ることができた。今後の藤原宮出土瓦の研究に活用していきたい。（石田由紀子）



図54 高台瓦窯で採集した胎土にクサリ礫を含まない瓦片



図55 高台瓦窯採集方形磚